



1 令和7年産の作柄状況について

本年の県下定点調査園での満開日の平均は、極早生・早生温州ミカンが5月11日、普通温州ミカンは5月15日、中晩柑類(不知火)は5月18日で、平年並みやや遅い結果でした。開花時点の作柄は、平年比で極早生温州ミカンは100%、早生・普通温州ミカンは96%、中晩柑類は103%となっており、各産地や園地によりバラつきはありますが、全体として、温州ミカンは平年並み多い傾向となっています。また、冬季の乾燥や寒波の影響による旧葉の落葉、葉色の淡色化など、樹勢の低下した園地が多く見られました。

生理落果が概ね終了する6月下旬頃から、温州ミカンでは極早生、早生

と熟期の早い系統から着果状況に応じた摘果を行い、連年安定生産を目指しましょう。

2 病害虫防除について

日本気象協会の発表によると、本年の梅雨入りは平年並みの6月上旬と予想されています。今後の急な気象変動によって防除のタイミングを逃さないように、早めの防除を心掛けてください。

また、香川県病害虫防除所が5月2日付けで発表した令和7年度病害虫発生予報第2号によると、ミカンハダニの発生が平年に比べて多い予報となっています。6・7月は1年を通じて特に発生が多くなる時期です。園内の果実や葉で発生を確認したら、被害が拡大する前に殺ダニ剤やマシン油乳剤を散布して対策してください(写真1)。近年、冬や春先にマシン油乳剤を散布しなかった園地では、春先から夏場にかけて大発生していることが多くなる傾向があるので注意しましょう。

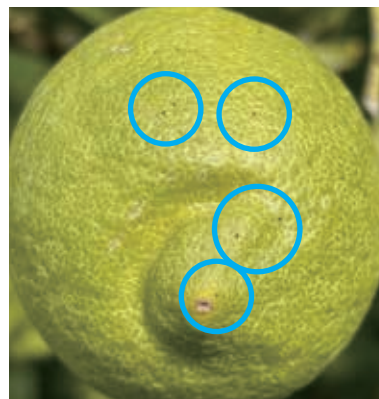


写真1 寄生したミカンハダニ(青色囲み)

3 温州ミカンの摘果

(1) 摘果の基本方針

摘果は、間引き摘果を基本としながら、隔年結果を是正するための樹冠上部摘果や半樹摘果(本誌5・6月に記載)があります。生理落果が概ね終了する6月下旬頃から、極早生、早生と熟期の早い系統から着果状況に応じた摘果を行い、連年安定生産を目指しましょう。

着果が少く中庸な樹では、大玉化

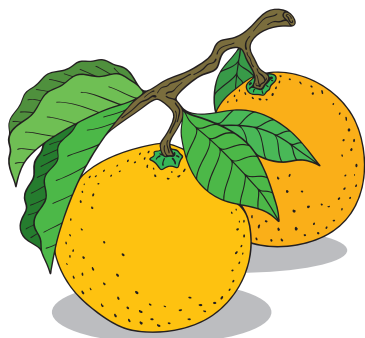




写真2 内なり・裾なりの果実は優先的に摘果



写真3 葉裏にある内なりの果実は優先的に摘果

や低糖度となりやすいので、粗摘果は控え、仕上げ摘果中心で果実品質の向上を図りましょう。
着果がやや多い・多い樹では、翌年の着果を確保しつつ、品質を高めや



写真4 小玉果や上向きの軸太果は優先的に摘果



すい後期重点摘果の導入を検討しましょう。着果負担をかけ、仕上げ摘果中心で適正着果量にするために、粗摘果では、内・裾なり果、小玉果を中心に摘果を行いましょう(写真2、3、4)。

(2) 後期重点摘果

後期重点摘果は、着果負担を一気に解除して残した果実に葉の光合成産物を分配し、品質を向上させる技術です。9月の仕上げ摘果で最終葉果比(約25枚)まで一気に落とします。しかし、この技術は仕上げ摘果の適期が短いため実施面積にも限りがあります。仕上げ摘果が遅れると小玉となるうえ、隔年結果が助長される場合がありますので、小原紅早生など手間が価格に反映できる品種で取り組みましょう。

「後期重点摘果の方法とポイント」

① 着果が多い樹での粗摘果

着花量が極端に多い樹やマルチ栽培の園地は生理落果終了後、7月中旬頃から粗摘果を開始し、極小果や内なり果、軸太果などを中心に全摘果量の半分程度を摘果します。

② 着果のやや多い・中庸な樹での粗摘果

着果が適度にあり新梢の発生もある樹は、8月頃から樹冠外周部の側枝に直接着生した軸太果、着果量の多い部分の内なり・小玉果を中心に全摘果量の20～30%程度を粗摘果します。また、肥大の良好な樹や着果量がやや少ない樹は、着果負担をかけるため摘果量を制限し夏芽が発生しにくいようにしましょう。

4 温州ミカンの品質向上対策

夏秋期の多雨により、糖度の低下、大玉化や浮皮の発生などが起こりやすくなります。こうした果実品質の低下を防ぐために、特に経営の柱となり得る小原紅早生の園地では、早期からのマルチ被覆などの対策を講じておきましょう。

かん水が実施できる園地は、早生では、梅雨明け後から被覆することで、樹に乾燥ストレスを与えやすくなります(写真5)。また、多雨の影響により、外から雨水が流入している場合は、マルチを巻き上げて乾燥を促してください(写真6)。特に、9月上旬までの期間は、効率的に乾燥ストレスを付与できるタイミングです。



写真5 マルチの全面被覆で樹に乾燥ストレスを付与

ただし、過乾燥は小玉、酸高果の発生を助長しますので、降雨が少なく土壌が乾燥し、葉の巻が見られる場合はかん水を行いましょう(写真7)。



写真6 マルチ外から雨水流入した場合、巻き上げて乾燥促進



写真7 過乾燥により葉が巻いている様子

熟期促進だけを目的とした植物調整剤として、エチクロゼート乳剤(フィガロン乳剤)があります。使用時期は、1回目は満開後50〜90日、2回目は満開後70〜110日となっており散布期間に幅がありますが、1回目は7月上旬頃、2回目は7月下旬〜8月上旬頃の早期に散布することで品質向上効果がより期待できます。

ただし、樹勢が弱い樹に使用した場合、枯れ枝の発生や樹が衰弱する場合がありますので、使用する際は適正着果の健全樹を選択して使用しましょう。

品質向上対策はマルチ被覆を基本とし、エチクロゼート乳剤の使用は被覆が困難な場合や、被覆をしても多雨の影響で土壌が乾燥ににくい場合に検討しましょう。

5 中晩柑類の摘果およびかん水

中晩柑は、商品性の高い大玉生産を目指して、生理落果が概ね終了した6月下旬から摘果を開始し、最終摘果量の70〜80%を粗摘果します。

(1) 粗摘果、仕上げ摘果

粗摘果では、内・裾なり果、直花果や4枚以下の有葉果を優先的に摘果、次に果梗が太く上向きで下垂しにくい有葉果も摘果します(写真8)。「不知火」、「はるみ」および「い

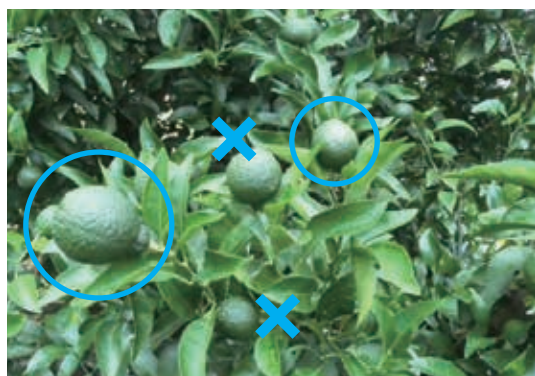


写真8 葉数の少ない果実は摘果し、葉数がある有葉果は優先的に残す



写真9 主枝先端の樹冠上部は全摘果

よかん」は、樹勢が低下しやすいので、主枝先端の3分の1を全摘果し、新梢の発生を促してください(写真9)。上部の果実は果頂部を中心に果皮が粗くなりやすいほか、以後、高所

での作業をする必要もなくなるメリットもあります。仕上げ摘果は、8月から開始して9月上旬頃までに、葉100枚に1果程度とし、キズ果、小玉果、遅花果、日焼け果等を摘果します。

(2) かん水

特に、「不知火」や「はるみ」は、夏期のかん水が重要となります。夏期に根を傷めると樹勢低下に繋がるだけでなく、肥大不良で小玉果率が高くなり、酸高果となりやすいので、梅雨明け後、少雨が続く場合は、十分なかん水を行って下さい。また、夏秋期に土壌が乾燥すると、こはん症が発生しやすいことにも留意してください。

6 苗木の管理

本年春に植えた苗木は、春芽が緑化し、6月下旬頃から夏芽が発芽します。発芽後は、春芽と同様に1腋芽1新梢になるよう芽かぎを行い、残す新梢の伸長・充実を促します。定期的なかん水を心掛け、窒素肥料の施用により新梢の伸長と充実を促しましょう。また、アゲハの幼虫やミカンハモグリガなどの被害を受けないよう防除を行きましょう。



7月には、梅雨が明け、気温の上昇とともに夏枝の伸長が活発になります。花芽分化が行われる時期のため、この時期の管理が今年の花や翌年の果実に大きな影響を与えます。せん定や誘引によって作業性の向上と日当たり不足の是正を図りましょう。

1 整枝(低樹高仕立て)

ビワは高木性で生長が早いいため放任状態では、樹高が10mになるものもあります。樹高が高いと作業性が悪くなり、内枝の量が増加する事で病害虫の発生が増加します。

そこで、樹高の切り下げを行い、作業性の良い樹形へ改造するとともに内部に日が当たるようにします。

ビワは一挙に強せん定を行うと樹勢が低下したり、がんしゅ病に罹病しやすくなります。そのため、成木から仕立てる場合、1年目には、主枝となる一番下の枝を残し、その上に発生している太枝を2〜3本間引くことで樹のふところに光を入れて新梢の発生を促します。2年目には、残し

た主枝の葉数を増やししながら、1年目に間引いた枝のもう一段上の太枝を間引きます。このように順次枝を間引きながら4〜5年程で主幹を切り返します(図1)。

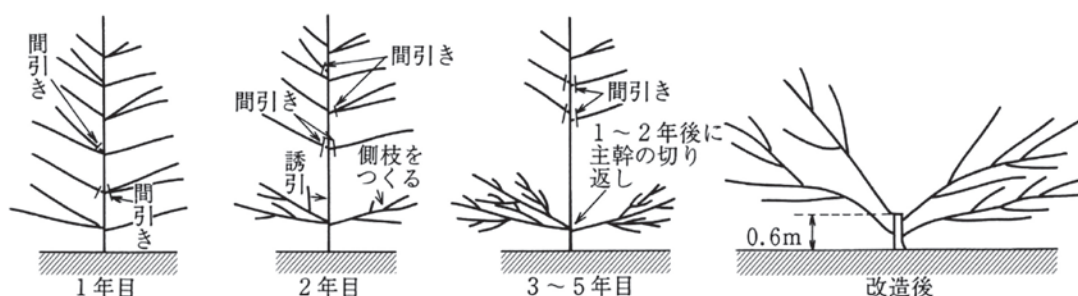


図1 主幹形樹の改造手順

2 せん定

せん定の時期は、収穫後の7月または花芽分化後の10月です。低樹高仕立てなどの樹形改造を行う場合には、収穫後の7月にせん定を行います。6月頃からの花芽分化期間に日照時間が短いと着花が少なくなります。その場合は蕾が確認できる時期まで遅らせましょう。

せん定は、枝が密生している部分の逆行枝や徒長枝、充実の悪い枝を間引きます。また、ビワは枝の年間伸長量が多く、枝の先端に花が着くため、長く伸びた枝は20cm程度切り戻して結果枝の更新を行います。

3 芽かき

収穫後に果梗枝から発生する夏枝は、7月中旬〜下旬に充実したものを残して芽かきを行います。このとき、花を着ける枝のほかに1本余分な枝を残し、葉を1枚付けて外芽で切り返しておく、翌年に着花する予備枝として利用できます(図2)。未結果樹では、樹の形を作るために年3回程度芽かきを行います。芽かきを行うことによってせん定を軽くすることができます。

4 病害虫防除

せん定や芽かきを行った後には、雨滴などにより傷口から、がんしゅ病に感染しやすくなります。そのため、

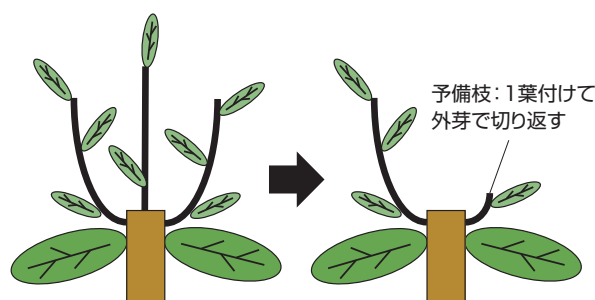


図2 芽かきの様子

樹体に傷がつく作業を行った場合、無機銅水和剤(コサイド3000など)やカスガマイシン・銅水和剤(カスミンボルドーなど)で防除するとともにせん定痕にはトップジンMペーストを塗り、傷口を保護しましょう。

ビワはクワカミキリの食入によって枝が折れやすくなり、ひどい場合には枯死します。※特に樹勢が弱っている樹を好んで食害する傾向があります。

成虫は盛夏期に産卵のために現れるので見つけたら捕殺しましょう。幼虫はフラスを目印にカミキリムシ類を対象としたエアゾール式殺虫剤(園芸用キンチョールE・ロビンフット)を食入部に噴射して防除します。



写真1 本年産収穫された「はなよめ」

1 生育状況
5月の気象状況（高松気象台データ）によると、平均気温は平年並みで推移し、日照時間は平年より短く推移しました。また、5月の1カ月間の降雨量は81.5mmで平年より少ない状況となっております。
生育については、6月中旬現在前年よりやや遅くなっております。また、7月以降気温上昇が予想されることから、中生種のあかつき以降の



写真2 二重袋除袋直後のモモ

品種については昨年同様高温多雨等の影響による「みつ症」等が懸念されるので、適期収穫を基本とした管理を心がけましょう。県内の極早生の出荷につきましては、6月10日の「はなよめ」よりスタートとなりました。
（写真1）
2 着色管理
(1) 二重袋の除袋
除袋は、遮光により果実の地色（緑色）が抜けて白色になった状態で外袋を外し、日光に当てることで鮮やかな着色とすることを目的としています。（写真2）
地色が抜けきらないうちに除袋すると、緑色が戻ってしまい着色が鮮やかに仕上がりません。逆に除袋が遅れると十分に着色しないうちに成熟してしまいます。また、除袋後に連続した曇雨天が予想される場合、

表1 モモ主要品種別袋の種類と除袋時期

品 種	着 色	袋の種類	二重袋の除袋時期
はなよめ	着色良好	無袋・白色系一重袋	—
日川白鳳	普通	白色系一重袋・二重袋	収穫7日前
みさか白鳳	普通	二重袋	収穫7日前
夢富士	普通	二重袋	収穫7日前
あまとう2号	普通	二重袋	収穫7日前
あかつき	普通	二重袋	収穫14日前
なつっこ	着色良好	二重袋	収穫10～7日前
なつおとめ	普通	二重袋	収穫14日前

日光が不足するため十分な着色が得られない可能性があります。除袋時期の目安を載せてありますので参考に除袋作業にあたってください。（表1）

(2) 新梢管理

樹冠内部の明るさを確保し、着色向上させることを目的として新梢管理を行います。

徒長枝を中心に、新梢が混み合つて過繁茂となり、樹冠内部を暗くしている枝をせん除します。ただし、若木や樹勢が強く徒長枝が多発している場合は、むやみにせん除せず誘引や枝の先端5cmを摘み取る作業（摘心）を組み合わせて樹勢の落ち着きを図りましょう。

また、主枝や亜主枝の陽光面の新梢をせん除すると日焼けの原因となります。せん除する場合は周囲の枝を利用して日陰を確保し、適当な枝がない場合は徒長枝の基部を20cmほど残して切り返しましょう。

摘心の場合は、摘心した位置から副梢が展開するため日陰を作る効果もありますので、枝の状態を確認しつつ前記にあつた各作業にあたってください。

(3) 支柱立て・枝吊り

果実が肥大すると、果重により枝が下垂します。下垂した枝が重なることで樹冠内部が暗くなつてしまい、その結果、着色不良となつてしまいます。また枝が裂けて折れる場合もあります（写真3）。このため、支柱立てや枝吊りを行い、下垂や枝折れ

支柱をすることで枝折れを回避する



写真3 枝折れしたモモの樹

を防ぎ、樹冠内部の明るさを確保します。

3 収穫

モモは収穫期になると、果実肥大が急速に進み、果皮の着色や大幅な糖度の上昇が起こります。収穫適期前の3日間でもその変化は大きいため、収穫適期を把握することが重要です。

モモの収穫適期は果実の果皮色と硬さを併せて判断します。目安として、果皮色は果梗部付近の地色が緑白色となった頃、硬さは果実を手のひらで包んだ時にわずかに弾力を感じる硬さ（硬度計で2.5 kg/cm前後）が収穫適期です。

収穫が早すぎると小玉で糖度が低

く、渋みが強い果実となります。一方、収穫が遅すぎると過熟で日持ち性が劣り、「みつ症」の発生する確率が高くなります。

また、着色不良の果実、逆に過剰な着色によって赤黒くなった果実は商品価値が低下するため、適期収穫を心がけましょう。

※昨年度は6月20日以降の降雨から7月上旬の高温により「みつ症」が多発した経緯があります。また、収穫期が曇雨天で経過する場合は、着色が遅れやすく、着色を待っていると果肉が軟化しますので果肉硬度には注意しながら収穫を行いましょう。

4 土壌管理

梅雨時期の過湿障害対策

モモは湿害に弱い作物です。園地に水が停滞すると酸素不足による根の機能低下を招き、果実品質の低下につながります。昨今の集中豪雨等も滞水しやすい状況を作るため、園地の排水状況を見回り、明きよを設置するなど、長い間滞水しないようにしましょう。

梅雨明け後の土壌水分管理

例年梅雨明け後（香川県の梅雨明けは平年7月17日頃）は高温晴天が続きます。梅雨明け後の急激な高温と乾燥による水分不足は、根の衰弱

を助長し、肥大不良や渋みの発生、成熟の遅延を招きます。また、翌年の花芽の生育不良や冬場の樹の急性枯死（胴枯症・凍霜害）の原因の一要因ともなるため晴天が続くようであればかん水（収穫5～7日前まで）を実施しましょう。

5 礼肥

礼肥の施用は樹体疲労の回復とともに、翌年作の花芽や葉芽の充実、貯蔵養分の蓄積を図ることを目的としています。8月下旬頃を目途に、収穫後はなるべく早く施用しましょう。一方で、若木や樹勢の強い樹では徒長や秋伸びを助長し、貯蔵養分の浪費、花芽や葉芽の充実不良を招きます。収穫後に、葉色が薄く、新梢の伸びが停止し、樹勢が落ち着いている樹に施用しましょう。

6 病害虫防除

梅雨時期は曇雨天が続く、病害被害が発生しやすくなります。昨年のカメムシ類の多発生など状況が深刻になる場合も予想されますので収穫中と収穫後の園地状況は暑さが厳しい中ではありますが、来年のモモの品質向上のためにも重要な作業となりますので適期防除に努めましょう。（表2）

表2 病害虫防除（7月～9月）

散布時期		病害虫名	基 幹 防 除				
早生種	中・晩生種		薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数) ／使用回数	10a 当たりの 散布量
—	7月1日頃	アブラムシ類 モモハモグリガ	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日／3回	500ℓ
		灰 星 病	ベルコート水和剤	1,500倍	66g	前日／3回	
7月15日頃 (収穫後)		モモハモグリガ シンクイムシ類	サムコルフロアブル10	5,000倍	20mℓ	前日／2回	500ℓ
		うどんこ病 灰 星 病 黒 星 病 ホモブシス腐敗病	ベンレート水和剤	2,000倍	50g	前日／3回	
8月 (収穫後)							
9月上旬		カイガラムシ類	コルト顆粒水和剤	2,000倍	50g	前日／3回	500ℓ
9月中旬		コスカシバ	トラサイドA乳剤	200倍	500mℓ	収穫後～発芽前 (幼虫食入期)／1回	
9月下旬～10月中旬 (落葉前までに)		せん孔細菌病	ICボルドー412	30倍	3.3ℓ	—／—	500ℓ



1 本年産概況

3月の気温について上中旬は低めで推移しましたが下旬は極端に高くなり、4月の気温も平年より高く推移しました。5月の気温は平年より低く推移しました。

降水量について4月は極端に少なく、5月は適度に降雨がありました。園地や樹によって様々ではありますが、気候の影響で開花期は概ね平年よりやや遅めとなっています。生育状況に応じて適期作業を徹底するとともに、周りと比較して極端に生育の遅れている果房は早めに除去して下さい。今後は梅雨後の病害発生に注意し、引き続き生産対策を行います。

2 かん水管理

(1) 無加温栽培

成熟期に水分が不足すると、早期落葉や日中の果粒収縮・細根の生育不良などを引き起こします。土壌が過度に乾燥しないように適宜かん水を行い、土壌水分を一定に保つようして下さい。また、収穫前後には新

根(秋根)の発生が始まります。新根は翌年産の貯蔵養分を蓄えるために重要な役割を持ちます。秋根の発生を促し、礼肥を効果的に吸収させるためにも、収穫後にも適宜かん水を行って下さい。

土壌の水分状態を簡易に判別する手法として、土壌水分計(pFメーター)があります。土壌に挿して設置することで、水分状態を数値で確認することが出来ます(写真1)。果粒軟化期以降はpF値2.2程度で軽い水分ストレス状態で管理することが望ましいです。ただし、挿し込む深さや圃場内での場所によって数字にバラつきがあるので、参考程度にして下さい。



写真1 土壌水分計の設置

(2) トンネル栽培

梅雨時期は降水によって土壌が過湿状態になりやすく、梅雨明け以降は気温の上昇に伴って葉の蒸散量が増えて乾燥状態となりやすくなります。

す。この時期の土壌水分の急激な変化は、縮果症や裂果の発生要因となります。梅雨明け後には、気象や土壌条件に応じて、適宜かん水を行い、土壌水分を一定に保つようによしましう。

3 今後発生が予測される病害虫

梅雨時期前後には園内の湿度が高くなり、病害が発生しやすくなります。特に、黒とう病(写真2)やべと



写真2 黒とう病



写真3 べと病

病(写真3)、うどんこ病(写真4)、ピオーネでは晩腐病(写真5)などの対策として、2回目のジベレリン処理前から袋掛け前までに実施する殺菌剤の防除を徹底しましょう。

4 シャインマスカット

(1) 無加温栽培

施設栽培では収穫期を迎えます。収穫は果実温度の低い早朝に行って下さい。収穫時期の目安は、1回目ジベレリン処理から100日程度とされていますが、果粒肥大や樹体の状態によって変動するため、適期を見極めて収穫を行います。



写真4 うどんこ病で裂果した果粒



写真5 晩腐病



写真6 糖度検査用の果粒



写真7 カスリ症

収穫前には、糖度検査・食味の確認を行います。糖度基準は、肩部18度以上もしくは房先17度以上です。収穫時には穂軸を持ち、未熟果(石ぶどう)や小粒果が混在していないかを十分に確認して下さい。また、果粒(ブルーム)が落ちないように、果粒には極力触れずに作業を行って下さい。荷造り時も脱粒に注意し、異物混入や病害虫被害果がないかを丁寧に確認しましょう。また、産地などによつては、房の上部に糖度検査用の果粒を残して房づくりを行っている事例がありますが、出荷時には必ず除去して下さい(写真6)。



写真8 縮果症

カスリ症(写真7)が発生した場合は、糖度検査をしたうえで販売担当者との協議し、速やかに収穫して下さい。カスリ症の原因の一つは、果粒の充実に対して果皮の老化が先行した結果であると考えられており、増糖期の日照不足や、果粒肥大が抑制されやすい若木などでは発生が多くなる傾向にあります。適切な着果量を維持し、スムーズな増糖につなげることで大切です。

(2) トンネル栽培

硬核期(満開後30〜45日)に樹体バランスに変化があると、縮果症(写真8)が発生しやすくなります。この期間中は、房管理・枝管理・極端なかん水は行わないで下さい。また、果房が強い日差しにさらされると日射症(写真9)が発生する場合があります。縮果症や日射症が発生した場合も、褐変した果粒を除去するとさらなる縮果症の発生を助長するためには除去せず、果粒軟化後に取り除きましょう。

5 ピオーネ

(1) 無加温栽培

施設栽培は収穫期を迎えます。着色が良好でも酸が高い場合があるため、収穫時には糖度検査だけでなく、食味も確認して下さい。着色期に夜温が高いと着色が遅れます。換気や夕方の散水などによって、園地の



写真9 日射症



写真10 玉直しを行い果面を整えた房

除きましょう。

果粒軟化期以降は、着房数(主枝1mあたり両側で6房)を再度確認し、副梢の管理や見直し摘粒、玉直し(写真10)などを行い、房づくりを仕上げます。その後、病害虫の防除をしてから袋かけを実施しましょう。

温度を下げましょう。シャインマスカットよりも脱粒しやすいため、果房の取り扱いには注意して下さい。

(2) トンネル栽培

シャインマスカットと同様に、硬核期の房管理・枝管理・極端なかん水は縮果症の発生につながります。果粒軟化後に副梢管理や見直し摘房などの仕上げ作業を行うようにして下さい。その後、晩腐病等の防除をしてからすぐに袋かけを行います。果実袋内の湿度が高くと、病害の発生につながるため、雨天時の袋かけ作業は避けて下さい。

近年、温暖化傾向や異常気象等によつて、着色期に夜温が高くなる傾向があり、着色不良が起きやすくなっています。基準を超えた着果過多や大房づくりなどは、着色不良の大きな要因となります。適切な着房数(主枝1mあたり両側で6房)と果房重(500g)を遵守して下さい。



1 本年産概況

本年は1月から3月中旬にかけて気温が平年より低く推移しましたが、4月以降の気温の上昇に伴い、発芽・展葉が早まり、概ね平年並みに推移しています。

2 摘果

摘果は果実肥大や品質向上だけでなく、生理落果や着果過多による隔年結果などの防止策として大事な作業となります。病害虫被害果、発育不良果だけでなく、日焼けする向きになっていないことや、肥大時期に枝に引っ掛かって傷にならないこと等も考慮してください。最終的に一つの結果母枝に2〜3果になるまで減らすようにしましょう。特に太秋は樹勢が弱ると雄花が多くつくようになりますので、摘果をしっかりと行ってください。

表1 主要品種の生育ステージ(香川農試府中果樹研)

品種名	2025年				2024年				平 年			
	発芽	展葉	満開	収穫盛期	発芽	展葉	満開	収穫盛期	発芽	展葉	満開	収穫盛期
早 秋	3/23	3/29	5/15	—	3/22	3/30	5/12	10/15	3/14	3/25	5/14	9/29
太 秋	3/24	3/30	5/15	—	3/24	4/3	5/12	10/4	3/21	4/1	5/13	9/29
松 本	3/25	4/1	5/18	—	3/25	4/3	5/16	11/12	3/19	3/30	5/16	10/29
富 有	3/25	4/1	5/19	—	3/25	4/3	5/17	11/20	3/26	3/31	5/18	11/15

※平年は過去10年間の平均

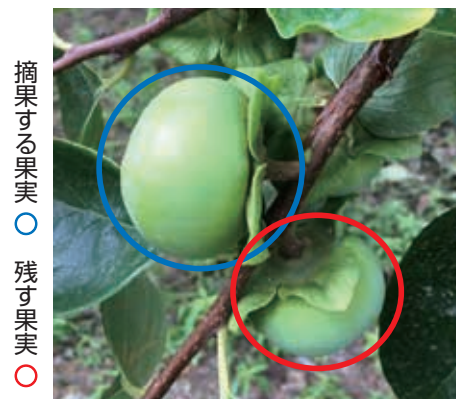


写真2 富有の摘果

- 摘果する果実
- ① 結果枝の中央部(基部の2〜3番目)
 - ② 下向き果、斜め下向き果
 - ③ ヘタが大きい腰高果
 - ④ 傷、病害虫被害の無い果実
- 残す果実(写真2)
- ① 発育不良果
 - ② 傷果、汚染果、病害虫被害果、奇形果



写真1 日焼け果

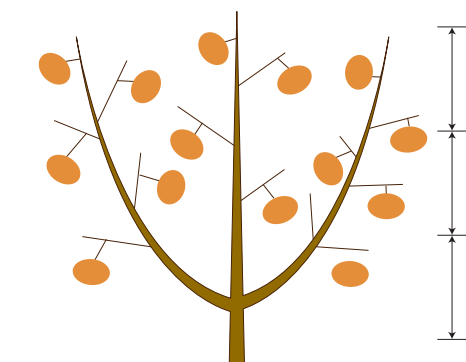
- ③ 葉が5枚以下の弱い結果枝の果実
- ④ 下枝、下垂枝の日当たりの悪い果実
- ⑤ 地面に接する果実
- ⑥ 遅れ花果
- ⑦ 枝に挟まる果実
- ⑧ 隣接している果実の片方
- ⑨ 上向き果
- ③ 結果部位と葉果比**
- 樹の部位によって葉果比が異なります。基本として、樹の上層部は10葉に1果、中層部は15葉に1果、下層部は20葉に1果を目安に果実を残しましょう(図1)。太秋は過剰に摘果を行うと、条紋、汚染が広がりますので、特に気を付けましょう。また早秋は奇形果や障害果が出やすい品種なので通常よりも10枚程葉を多く残しましょう。

④ 新梢管理

枝同士が込み合って、内側に伸びた枝を放置すると、日照不足だけでなく、通気性や薬剤散布がうまくいかず、炭疽病などの病気を引き起こす恐れがあります(写真3、4)。摘果の作業と合わせて、そのような枝を見かけた際には、必ず除去するようにしてください。太秋に関しては雄花が多かった枝や伸長が弱い枝には実が付きませんので母枝の基部



写真3 炭疽病が発生した新梢



上層部	10葉に1果 (早生系15葉)
中層部 (幼木～若木も同様)	15葉に1果 (早生系20葉)
下層部 (成木～老木も同様)	20葉に1果 (早生系25葉)

※渋力キは果実を多めに残しても良い。

図1 結果部位と葉果比



写真4 炭疽病が蔓延し一部枝が枯死した樹

まで切り返し、陰芽の発生を促しましょう。早秋は炭疽病にかかりやすい為、二次伸長した枝の除去や、こまめな摘心を行い、結実部の周辺管理をしてください。

⑤ 誘引・枝つり

果実が肥大するにつれて枝が下がってくるので、日当たりを考慮し、側枝や結果母枝の誘引、枝つりや支柱支えを行ってください。

⑥ 土壌水分管理

土壌水分不足は生育の抑制を引き起こし、品質低下につながります。晴天が続く場合には7～10日おきに20～30ミリ程度のかん水を行ってください。

さい。また乾燥防止のために樹幹下に敷き草、敷きワラをすることで水分の蒸散を抑えることができます。

⑦ 袋掛け栽培(富有柿)

富有柿の高品質生産、高単価販売、収穫期の分散を目標として、11月下旬から12月上旬に収穫となります。7月下旬ごろから袋掛けを行い、カラスの被害対策としてテグスなどを張りましょう。

表1 府中果樹研究所における開花盛期

品 種	開花盛期		
	令和7年	令和6年	平年値
キウイっこ1号	5月4日	5月1日	5月3日
キウイっこ5号	5月4日	5月3日	5月4日
さぬきエメラルド	5月6日	5月4日	5月5日
さぬきエンジェルスイート	5月5日	5月4日	5月6日
さぬきゴールド	5月9日	5月7日	5月7日
ハイワード	5月17日	5月15日	5月16日
香緑	5月17日	5月16日	5月16日
マツア	5月16日	5月15日	5月14日
トムリ	5月15日	5月17日	5月17日

平年値は過去10年の平均値（H27～R6）



1 生育状況

本年産キウイフルーツの開花状況は、昨年と比べて1～3日遅く、平年と比べて1～2日遅れました（表1）。

2 新梢管理

キウイフルーツは6月から9月頃まで枝の伸長が続くため、2週間に1回程度は新梢管理を行います。結果枝の葉に副梢や突発枝が覆い被さらないように、常に木漏れ日が射す程度を維持します（図1）。翌年の結果母枝候補は残し、それ以外の不要な徒長枝を基部から除去します。また、副梢は1～2節残してせん除します。



図1 夏枝管理後の様子(木漏れ日が射す程度)

側枝の更新等に利用できる位置から発生した徒長枝で、誘引が遅れて硬化した場合は、1～2節残してせん除すると、副梢が発生しますので、誘引して利用できます（図2）。

3 環状剥皮

(1) 目的

環状剥皮は、果実肥大、糖度上昇に効果があり、「さぬきエンジェルスイート」では種子周辺部の赤色発色の向上にも効果があります。

(2) 処理方法

時期は7月中旬～8月中旬です。剥皮処理は、主幹部もしくは結果母枝基部に行い、剥皮幅はcm約1～2cmで、若木では狭くします（1cm程度）。幅が広すぎるとうまく癒合しない場合があります。処理後約1ヶ月で癒合する幅が理想です。

接ぎ木ナイフ等を用いて切れ目を入れ、ドライバー等を用いてリング状に皮を形成層まで完全に剥ぎ取り



図2 徒長枝せん除後の副梢発生



図3 「さぬきエンジェルスイート」の果実断面の様子

ます。表皮より内部の白い皮（篩部組織）が少しでも残ると効果が劣ります。逆に形成層より深く傷つけると樹液が出ます。剥皮内部の木片等のごみはきれ



リング状に表皮を剥ぎ取る



癒合剤を塗布する



ビニールテープを保護する

図4 環状剥皮の手順

いに取り除きます。木片等が内部に残るとその部分の癒合が不完全となり、コブになりやすいです。

傷口に癒合促進剤（トップジンMペースト等）を塗布し、乾燥防止のため、接ぎ木用ビニールテープ等を巻いて保護します。癒合後（処理後約1ヶ月）は、速やかにビニールテープを取り除きます。テープがあるとコウモリガ等の食害を受けやすくなります。

(3) 注意事項

○着果過多の樹では、効果が劣る場合もあるので摘果を徹底してください。

○剥皮処理した樹の果実は、貯蔵性が劣ります。

○樹勢の良好な樹で実施してください。**樹勢の弱い樹には行わないでください。**

4 水分管理

キウイフルーツは乾燥にも湿潤にも弱い作物です。そのため、夏の栽培管理で最も重要な作業がかん水となります。

乾燥が進むと葉焼けが生じ、早期落葉すると果実の日焼けが多発します。ひどい場合には枯死に至りますので、常に適湿に保つ必要があります。かん水は量が多すぎると下層の根群が過湿で根腐れを起こす場合が

あります。水田転換園や排水不良園では排水対策を行うとともに少量多かん水を行い、過かん水に注意しましょう。

近年は夏期に線状降水帯による集中豪雨が多発しております。過剰な降雨を園外に速やかに排出するよう明渠や高畝を整備しましょう。

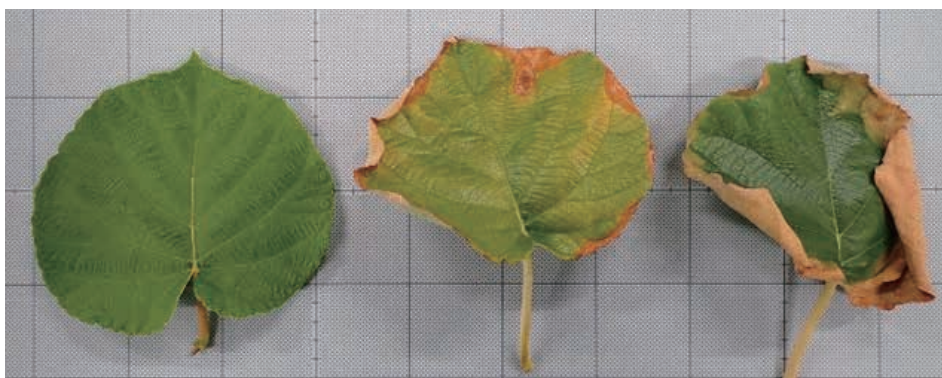


図5 乾燥による葉焼け症状



図6 日焼け果



図7 乾燥による枯死(8月)

Ⅴ 病害虫防除

香緑・ヘイワード・讃緑

月 旬	基 幹 防 除						応 急 防 除					
	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ 当たりの 薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量
7 上	キウイヒメヨコバイ キイロマイコガ	㊟パダンSG 水溶剤	1,500倍	66g	30日、3回	400ℓ	果実軟腐病 灰色かび病 (降雨が多い場合)	ナリアWDG	2,000倍	50g	前日、2回	400ℓ
	クワシロカイガラムシ	コルト顆粒水和剤	3,000倍	33g	前日、3回							
8 中	カイガラムシ類	トランスフォーム フロアブル	1,000倍	100mℓ	3日、3回	400ℓ						
	貯蔵病害 (灰色かび病)	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
							キウイヒメヨコバイ カメムシ類 キイロマイコガ	㊟アグロスリン 乳剤	2,000倍	50mℓ	7日、3回	400ℓ

さめきゴールド

月 旬	基 幹 防 除						応 急 防 除					
	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ 当たりの 薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量
7 上	キウイヒメヨコバイ キイロマイコガ	㊟パダンSG 水溶剤	1,500倍	66g	30日、3回	400ℓ	果実軟腐病 灰色かび病 (降雨が多い場合)	ナリアWDG	2,000倍	50g	前日、2回	400ℓ
	クワシロカイガラムシ	コルト顆粒水和剤	3,000倍	33g	前日、3回							
8 中	カイガラムシ類	トランスフォーム フロアブル	1,000倍	100mℓ	3日、3回	400ℓ						
	貯蔵病害 (灰色かび病)	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
							キウイヒメヨコバイ カメムシ類 キイロマイコガ	㊟アグロスリン 乳剤	2,000倍	50mℓ	7日、3回	400ℓ

さめきエンジェルスイート・さめきエメラルド

月 旬	基 幹 防 除						応 急 防 除					
	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ 当たりの 薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量
7 上	キウイヒメヨコバイ キイロマイコガ	㊟パダンSG 水溶剤	1,500倍	66g	30日、3回	400ℓ	果実軟腐病 灰色かび病 (降雨が多い場合)	ナリアWDG	2,000倍	50g	前日、2回	400ℓ
	クワシロカイガラムシ	コルト顆粒水和剤	3,000倍	33g	前日、3回							
8 中	カイガラムシ類	トランスフォーム フロアブル	1,000倍	100mℓ	3日、3回	400ℓ						
	果実軟腐病	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
	貯蔵病害 (灰色かび病)	ベルコート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回	400ℓ	キウイヒメヨコバイ カメムシ類 キイロマイコガ	㊟アグロスリン 乳剤	2,000倍	50mℓ	7日、3回	400ℓ

※赤字は昨年からの変更点



はじめに

農薬の登録内容は随時更新されているため、収穫前日数や回数、希釈倍数等については使用前にラベル等を確認しましょう。また、農薬散布の際には、近接園地の栽培作物、学校などの公共施設や住宅地等に農薬が飛散しないよう細心の注意を払いましょう。

果樹共通

Ⅰ 果樹カメムシ類

果樹を加害するカメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、(写真1、2)クサギカメムシ、アオクサカメムシ)の被害は、吸汁された部分がスポンジ化してくぼみを生じ、商品価値を大きく損ないます。また、幼果期に加害を受けると落果する場合があります。4月中旬から8月頃までは主に前年に越冬した成虫が加害し、モモ(写真3)、ビワ、ブド



写真1
チャバネアオカメムシ



写真2
ツヤアオカメムシ



写真3 モモ カメムシの被害(ヤニ)

ウ、ナシが特に被害を受けます。8月以降では主に当年成虫(新成虫)により加害され、カキ、カンキツ類が特に被害を受けます。越冬成虫を中心とした平年の発生ピークは6月中旬、7月上旬(図1:黒点線)ですが、新成虫を中心とした平年の発生ピークは

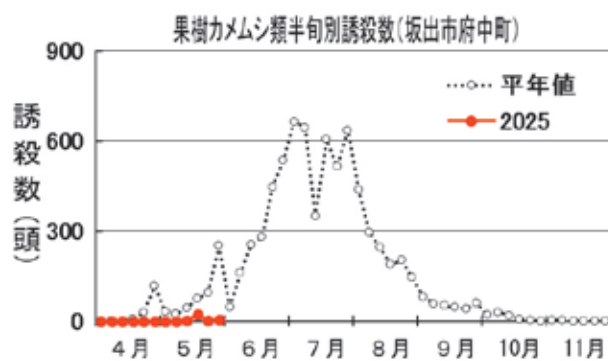


図1 数値はチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ、アオクサカメムシの合計値

7月下旬～8月上旬(図1:黒点線)にあり、成虫の寿命は1年程度と長く、被害は10月頃まで続きます。

本年度は多発生した昨年の状況とは異なり、4月中旬以降の果樹カメムシ類の誘殺は平年よりもやや少く、並で推移しており、越冬世代成虫の発生は平年と比べ、やや少ない発生と予想しています。(図1:赤線)しかしながら、スギやヒノキの花粉飛散量が多く、果樹カメムシ類の産卵に必要となるスギやヒノキの球果が多くなり、8月以降の新成虫の発生量が多くなる可能性がありますので、新成虫の果樹園への飛来に注意しましょう。病害虫防除所が発表してい

る病害虫発生予察情報を参考に今後の発生動向に注意して下さい。

● カンキツ

① 黒点病(写真4)

枯れ枝が伝染源となり、その処分が不十分であったり、降水量が多かったりすると多発します。例年より梅雨明けが遅れ、累積降水量が多くなる場合には特に注意が必要です。なお、防除暦に記載されている黒点病対象の薬剤は保護殺菌剤主体ですので、樹全体に薬液がかかるよう丁寧に散布する必要があります。前回の防除から30日または累積降水量が200mm〜250mmを超えた場合を目安に防除を行いましょう。



写真4 ミカン 伝染源となる枯れ枝と黒点病の被害果

② ミカンハダニ

梅雨明け頃から発生が急増します。前年発生が多かった園地では注意して下さい。ほとんどのハダニ剤

は浸透移行性が無く、薬液がかからないと効果を発揮しないため、十分な量を葉裏までかかるように散布して下さい。特に、冬期にマシン油乳剤を散布しなかった園地で、春先から夏場に大発生している事例が見受けられており、本年度も多発園地が確認されています。

③ ミカンサビダニ(写真5)

6月下旬から7月下旬にかけて、葉上で増殖した虫が果実へ移動する時期にあたり、梅雨明け後の早い時期に薬剤防除を行う必要があります。夏が高温小雨の年には短時間に増殖し、被害をもたらすことがあります。被害を確認してからの防除では効果が低いので、早めの防除を心掛けて下さい。昨年、本害虫による被害が発生した園地では特に注意が必要です。

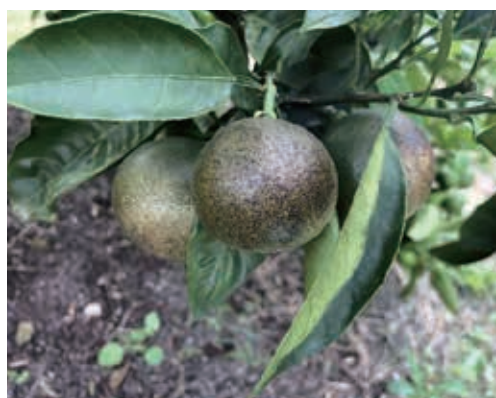


写真5 ミカン ミカンサビダニの被害果

● モモ

① 灰星病(写真6)

前年の発病果や枝で越冬した病原菌は4月頃から胞子を形成し、胞子が飛散し、まず花に感染して花腐れ



写真7 モモ 灰星病 花腐れ



写真6 モモ 灰星病 果実における被害



写真8 モモ ナシヒメシンクイ 芯折れ被害

(写真7)を起こします。次に枝で病斑を形成して、果実への伝染源となります。収穫期の20日前頃から発病しやすくなり、収穫後に市場や店頭で腐ってくることもあるため収穫期まで定期的な防除に努めましょう。

2 シンクイムシ類

新梢に食入して芯折れ(写真8)を発生させたり、果実に食入したりして商品価値が無くなります。香川県では、枝の芯折れはナシヒメシンクイ、果実被害はモモノゴマダラノメイガによる被害が主因であることがほとんどです。7～8月は果実での被害が増加する時期に当たりますが、幼虫が果実に入った後では手遅れとなりますので、6月下旬から収穫期にかけて定期的な薬剤防除が必要です。



写真9 カキ 炭疽病(果実)



写真10 カキ 炭疽病(新梢の病斑上に鮭肉色の胞子が形成されている)

1 炭疽病(写真9、10)

6月下旬頃から枝や新梢上の病斑で形成された胞子が果実へ飛散して黒色の病斑を形成します。梅雨期の防除は、十分に行う必要があります。すでに新梢に黒い炭疽病の病斑が見られる園地では徹底して防除を行う

カキ

て下さい。なお、防除暦に記載されている炭疽病対象の薬剤は保護殺菌剤

主体ですので、樹全体に薬液がかかるよう丁寧に散布する必要があります。

2 カキノヘタムシガ

粗皮下のまゆの中で越冬した本害虫の2025年における越冬世代成虫発生ピークは、5月20日頃で平年より2日遅い発生で、発生量は平年よりやや少ない発生でした。成虫は、結果枝の先端付近に多く産卵します。そこから、ふ化した幼虫は芽を食害しながら移動し、果実に食入します。防除のポイントとは幼虫が芽を食害している時期で、成虫発生ピークの7～10日後にあたります。今後、2回目の防除が予定されていますが、その際の成虫発生ピークは平年7月21日頃です。薬剤散布のタイミングが重要ですので、病害虫防除所のホームページや7月の病害虫発生予察情報等を参考に適期に防除を行うようにしましょう。

ブドウ

1 ペと病

新しい柔らかい組織に発生しやすい、古くて硬い部分には侵入しない性質があります。若葉では葉脈を超えて病斑が広がり、葉裏全体に雪白色のカビを生じます。トンネル露地栽培で

は、7～8月はさび病の防除をかねてICボルドーを散布して下さい。

2 晩腐病

病原菌は結果母枝や切り残した果梗枝、巻ひげの組織内で菌糸の状態です。越冬した後、6～7月の梅雨期に盛んに胞子を形成し、雨滴により果実に達して感染します。感染後、ほとんど症状を現すことなく潜伏し、果実の酸が減少する着色期になって発病します。発病を確認してから防除では手遅れになります。このため薬剤防除は落花と果実が小豆粒大（開花10～15日頃）の時期が基本となります。

● キウイフルーツ

1 果実軟腐病

果実軟腐を引き起こす病原菌の一つであるBotryospheria菌は、粗皮や老化した枝の組織内で越冬した後、6～7月の梅雨期に盛んに胞子を形成します。胞子は雨滴により果実に達し感染します。感染した菌はほとんど症状を現すことなく潜伏し、貯蔵中に発病します。薬剤防除は幼果期～果実肥大期に必ず行いましょう。また樹勢を適正に管理するとともに、袋かけを行うことも有効です。

2 かいよう病

7月～8月は、樹体内で菌密度が低下する時期ですが、発生園地やその周辺の園地では、低温や降雨が続くなどの気象条件によっては追加的に抗生物質を散布して蔓延を防止しましょう。

本病害は園地での発生を的確につかむことが重要で、未発生園地では、日頃から園地の樹を観察するようにして下さい。本病に酷似した疑わしい症状がある場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターやJA営農センターもしくは農業試験場病害虫防除所へ連絡して下さい。

また、本病害の侵入防止のため園地に入る前は靴及び手の消毒を行い、園地から出る際は服や帽子、靴に付いた植物残さや土を払い落としましょう。せん定ばさみ等はこまめに消毒し、発生の疑わしい樹のせん定、芽かき等の作業は最後に行って下さい。

● ビワ

1 ビワキジラミ

果実にすす病（写真11）の被害を出す害虫で、香川県では2016年に発生を確認以降、2021年3月には県下全域に発生を確認しています。収穫時に果実被害が確認された園では、本

害虫の密度が高くなっていますので、収穫終了後に必ず防除を行い、密度を低減させましょう。ビワキジラミの成虫が葉裏の主脈沿いに多く見られる（写真12）7月中旬までにマラソン乳剤（2,000倍）を散布することで、密度を低減させることができます。

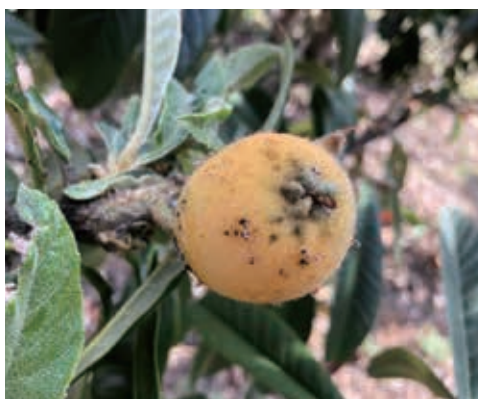


写真11 ビワ ビワキジラミによる被害果



写真12 ビワ
葉裏に密生しているビワキジラミ